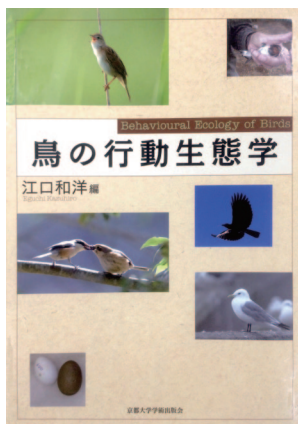


書評「鳥の行動生態学」

千田万里子 (公益財団法人山階鳥類研究所)*

江口和洋 (編) 京都大学学術出版会,
2016年3月, 3,200円+税, ISBN: 978-4814000005



皆さんは、初めて論文や専門書籍に触れ、その分野を俯瞰する経験をした、いわゆる「巨人の肩の上に立った」時のことを覚えておいでだろうか。辞書を引き余白に書き込み、引用を辿ってネットサーフィンならぬ論文サーフィンに明け暮れた日々は、語学の壁に立ち向かった達成感と新しい知識を得た興奮に彩られ、誰しもひとかたならぬ思い入れがあるものだろう。私自身が学生の頃、最初に指導教官から紹介されて夢中になって読み込んだのは、発行されて間もない *Current Ornithology* vol. 16 に掲載されていた1つの総説であった。*Current Ornithology* は、5~10個程度のトピックスからなる総説集で、1983年以降、ほぼ1年に1冊のペースで16刊、その後10年ぶりに17刊目が発行されたが、その後新刊が発表される気配がない。*Current Ornithology* の有用性は2016年現在も色褪せることはないが、生物学のイロハを学び、これから自分の研究を始める人におすすめする総説集としては、もう少し背の高い巨人を、つまり *Current* (最近) の情報を含んでいて欲しいというのが正直なところである。

そこで本書の登場である。その名の通り、鳥類の行動生態学を取り上げた書籍であるが、分野全てを網羅した教科書というよりは、行動・生態を考察する中で注目されてきた11のトピックス (血縁認知・対称性のゆらぎ・配偶システムと浮気・雄から雌への給餌・子の性比調整・子殺し・托卵・知能的採餌行動・警戒声・さえずり・ストレスホルモン) について、最新の研究事情を紹介する構成になっている。つがい形成・産卵・抱卵・育雛などの繁殖期の行動に関連するトピックスが多いことが特徴である。最新の知見を紹介するだけに留まらず、その分野の展望や課題についても併せて触れられている。もちろん、引用文献は全て各章末に一覧が掲載されている。繁殖期に野外調査をすることが多い卒論生以上の学生にとっては、心強い一冊だ。

主要な読者を研究者・大学院生と想定しているため、行動生態学に馴染みのない方には難解な用語が多いかと思う。しかし、これだけの内容を、日本語かつこのお値段で読める機会はそう多くないの

で、編者のまえがきにもあるように、鳥学に興味のある学部学生・高校生にはぜひチャレンジしていただきたい。また、鳥学の最新の知見を得たいが、身近に研究者がいない・鳥学系の雑誌や書籍が閲覧できない・論文サーフィンの時間がない・英語が苦手といった方にも大変有用だ（もっとも、大半の引用文献は英語なので、引用元にあたる際にはお心積もりいただきたい）。個人的には、海鳥類が嗅覚による個体識別を行うこと、雌が子の性比を調整する生理メカニズムが解明されつつあること、協同繁殖種において自身の繁殖を助けるヘルパーを増やすために独立した子の繁殖を妨害する場面があることなど、学生当時で止まっていた知見を更新できたのは大きな喜びであった。バンダーの皆さんにとってはなじみの薄いトピックスが多いかもしれないが、放鳥と再放鳥の間にあるドラマに思いを馳せる良い機会になるだろう。本書の内容が、日々の調査やバードウォッチングで目にする何気ない光景に、思わぬ気づきを与えてくれるかもしれない。また、クジャクの羽の目玉の数・浮気・托卵・カラスのクルミ割りなど、テレビ番組等で良く取り上げられてきたトピックスも含まれるので、それらの現象が持つ意味をより深く知りたい方にとっても、本書は読み応えがあるだろう。日本語だからこそ、プロアマ問わず鳥学に興味を持つ多くの方にお読みいただき、11人の巨人の肩の上から見える新しい景色を満喫されることを願っている。